

日米協会金子堅太郎賞 過去受賞者

第3回金子堅太郎賞（2019年）受賞者

米国側 受賞者

ヘレン リンズバーグ 氏 オハイオ州出身 (グレイター・シンシナティ日米協会推薦)

地元中学、高校で長年にわたり日本の美術史や写真を教えると共に、自ら撮影した写真を織り交ぜながら日本の芸術、文化、歴史についての執筆活動を行ってきた。1989 年来 日本からの 18 人の学生や2名の教員のためのホームステイ先となってきた。その期間はまちまちで6ヶ月から5年にわたる。ホームステイ滞在者からはアメリカのパパ、ママと呼ばれるほどその関係は親密で、今でも「21 人の孫」を含めた交流が続いている。これに加え 2000 年以降和太鼓を習い、現在でもシンシナティ・デイトン太鼓で会の運営と演奏のリーダーも務め、日本との交流深化をリードする活動を休みなく続けている。

日本側 受賞者

チャーリー 永谷 氏 熊本県出身 (熊本日米協会推薦)

国内で最大のカントリー・ミュージックのフェスティバル「カントリー・ゴールド」を 30 年以上にわたり熊本で開き日米の多くのミュージシャンとファンを集めてきた。94 年の歴史を持つ Grand Ole Opry(テネシー州ナッシュビル)に 29 回出演するなどカントリー・ミュージックを通じて日本とアメリカの心をつなぐ役割をしてきたことは米国政府から評価され、1999 年にクリントン大統領夫妻主催のホワイトハウスの小渕総理夫妻歓迎晩餐会にゲストとして招かれ、ハガティ前大使からも米国名誉文化大使に任命されている。

特別賞

千 玄室 大宗匠 京都府出身 (京都市日米協会推薦)

1964 年に裏千家第 15 代家元になり 2002 年家元を第 16 代に継承、大宗匠となる。大宗匠はお茶を英語で Tea Ceremony と訳されていたことから茶が形式にこだわる儀式的なものとの誤解を与えてしまったが、じつは茶は世間の上下関係と隔絶した空間で、人がお互いを敬い、自然をあじわう精神的なものであるとの啓蒙活動を行ってきた。これが米国人に理解され、米国各地に広くお茶が広められることにつながった。裏千家の淡交会はアメリカ各地に37ある。各地の大学にも茶室を寄贈し、実技を学科にとりいれているところもある。

第2回金子堅太郎賞（2018年）受賞者

米国側 受賞者

ジャネット・サウスポール氏 ペンシルベニア州出身 (ペンシルベニア日米協会推薦)

ペンシルベニア大学卒、ピッツバーグ大学にて医学博士号取得。現ピッツバーグ大学メディカルセンター (UPMC) 教授。関連学会会員 (9 学会)。専門分野は家庭医療分野。飯塚病院と UPMC の看護師や医師の相互交流を推進し、実地研修や教育を通じて看護技術の向上に 10 年の実績を積みこれを基礎にしてピッツバーグ市と飯塚市の幅広い交流に繋げた。2011 年の東北大震災の際にはピッツバーグ地域で多額の寄付を募り陸前高田病院に医療機器を寄付した。

日本側 受賞者

葉佐井 博巳氏 広島県出身 (広島日米協会推薦)

広島大学名誉教授。広島大学卒、核物理学者被爆者。広島大学などで被爆建物に残る放射線の測定データ収集などの研究を続ける傍ら 83 年から広島大学工学部教授。86 年に広島大学球部部長、広島六大学野球連盟理事に就任。広島県からはハワイへ戦前から移民が多数渡っており関係が深く、87 年から広島～ハワイ親善野球大会を毎年継続開催し今日に至っている。同氏は当初から親善野球大会を推進した。92 年広島六大学野球連盟理事長。2001~05 年広島国際学院大学学長。2015 年から広島六大学野球連盟顧問。葉佐井氏は 30 年に亘り広島とハワイの学生野球交流に取り組みハワイ側の理解者をも得ながら日米の若者の相互理解に草の根レベルで多大な貢献をされた。

第1回金子堅太郎賞（2017年）受賞者

米国側 受賞者

ジーン・ツチャ氏

カリフォルニア出身

(南カリフォルニア日米協会推薦)

カリフォルニア生まれの日系二世の女性。幼少期から日本語、舞踊、茶道、華道など日本文化に親しんだ。戦争中はユタ州の日系米人収容所に入れられていたが、戦後カリフォルニアに戻り日米の真の相互理解のためには交流を通じ両国民が親しく接することが重要であるという信念のもと、多くの交流行事でヴォランティアとして活躍してきた。特に1959年にロスアンジェルス市と名古屋市が姉妹都市となった際には、記念行事の責任者を委嘱され、700名もの出席者の会合を開き、大成功に導いた。その後も姉妹都市委員会の33代にわたる米側委員長に助言する役割を続けてきた。また南カリフォルニア日米協会でもヴォランティアとして活躍し、副会長までつとめた。

日本側 受賞者

藪添 泰弘氏

和歌山県出身

(和歌山日米協会推薦)

和歌山県の県立高等学校の英語教諭、県教育委員会社会教育課長、県立耐久高等学校の校長を経て現在学校法人東海学園和歌山外国語専門学校学園長。和歌山日米協会専務理事もつとめる。教育関係の仕事に長年にわたり従事する傍ら、高校生・大学生などの青少年交流に取り組んできた。これまで約30回県内外の青少年グループを米国に引率し、また過去40年間以上に亘り、ほぼ毎年米国やアジアからのホームステイを自宅で引き受けてきた。中には、1年間滞在する学生もあり、藪添氏自身これまで、自宅にこうした米国人留学生を3人住ませた。同氏とこれら元留学生との間の交流は今も続いている。

特別賞

ジョー・D・プライス氏

オクラホマ州出身

(国際交流基金推薦)

24歳のときニューヨークで「葡萄図」に出会い伊藤若冲作品と知らず購入。その後若冲や曾我蕭白や長澤蘆雪など当時必ずしも一般に認められていなかった江戸時代の名画を自らの鑑賞眼を頼りに悦子夫人とともに収集し、江戸絵画の一大コレクションを築きあげた。また自宅の「心遠館」の作品を研究に来る若手研究者のために自宅の傍に宿泊設備を建設提供するなど日本美術を専攻する日米の大学院生・研究者の育成を支援してきた。ことにJAWS(日本美術を専攻する米国大学院生のワークショップ)は1987年に創設され、すでに250名が参加している。また日本への恩返しとして東日本大震災のわずか1年後には被災者を癒すため自らが保険料を負担して米国から日本に重要作品を運んだ。この結果、岩手、宮城、福島の本北3県で順次「若冲が来てくれました」展を開き、夫妻もほぼ毎日会場に詰め、説明し、被災者を励ました。この開催は日本への感謝のしるしであるとして日本および日本人への友情を表した。



第3回金子堅太郎賞授賞式



第2回金子堅太郎賞授賞式



第1回金子堅太郎賞授賞式